



Photo: Alvin Tan

滝口 健 (たきぐち・けん)

シンガポール国立大学英語英文学科演劇学専攻リサーチフェロー。PhD(日本研究)。同専攻が進めるオンラインアーカイブ『Asian Shakespeare Intercultural Archive (AISIIA)』プロジェクト副代表、翻訳エディター。元国際交流基金クアラルンプール日本文化センター副所長。在職当時から多数の国際共同制作にプロデューサー、翻訳、ドラマトウルクとして参加。参加作品に『あいだの島』(世田谷パブリックシアター、Instant Café Theatre Company [マレーシア]、国際交流基金、2001年)、『クアラルンプールの春』(パパ・タラフマラ、Five Arts Centre [マレーシア]、国際交流基金、2004年)、『モバイル』(The Necessary Stage [シンガポール]、2006年)、『Reservoir』(TheatreWorks [シンガポール]、2008年)など。2002年にマレーシアの舞台芸術賞 Cameronian Arts Awards 特別賞受賞。

Article—3

ある物体は名付けられる以前より、常にそのものである。

塚原悠也
Yuya Tsukahara

ジャンルを超えて活動/パフォーマンスを展開するcontact Gonzo設立者の一人であり、2011年度より当財団セゾン・フェローの塚原氏に寄稿していただいた。(編集部)

名前のあるものは、人間によって認識された物である。それは社会の中において概念上固定化された物である。ただし、名付けられた物体もしくは状態、状況、つまりある種の概念の総体は常に動きつづけているので、ある時期が来るとに名付け直されなければならない。動きつづけている、というのは人間が協働で動かしているのである。もちろん動かさなくなった物もある。

名前のある料理を作ろうとすると、必ず何かが足りない。もしくは厳密に買い物をする必要がある。そのリストのひとつひとつがその名前を成立させる必要条件であるからだ。しかし、厳密に買い物をしようとする、季節で安くなった旬の食材を買いそびれる。しかし、名前とは常に仮称であると考え、買い物リストは厳密でなくなる。「その名前“のようなもの”」を作る事が可能になるからだ。大事な事は、それが全く違う物ではないということだ。名前は否定される事なく、

同時に常に内から外から揺るがされる必要がある。異なる素材で作ったものの名前が成立しないのではという不安はたいした問題ではない。作り出した料理は、名前がなくても目の前にある。というのが僕の立場で、ある概念に付与した名前を保持する必要があるという人もいる。状態を強化したがる人と、概念のアウトラインをいつも書き直したい人がいる。それは役割の違いでまた別の仕事である。

いきなりだが「コンテンポラリーダンス」はどうか。「コンテンポラリーダンス」は名詞としては随分と変わっている。

これは何を表しているのか。メソッドか、理論か、形か。いずれでもない。これは「領域」だ。現在何かしらの名前で保持されている様々なダンスの方法論から外れ始めたダンスの考え方、その形を一時収容するための領域だ。なので『「コンテンポラリーダンス」をしたい。』という文法は成り立たない。例えば「写真をやりたい。」というふうには決して成立しない。つまり「コンテンポラリーダンス」はある条件で常に、既に、成立している不明な物である。少なくともそうあるべきだ。

「イタチのいる家」から「いまいるフライブルグ」まで、時系列的に遡る

いきなりだがここから友人のメコン・タイガー氏にインタビューしてもらおう形ですすめたい。たまたま別件でやり取りをしていて、この話にもつながると思ったので英語でのやり取りを自分で翻訳した。メコン・タイガーは古くからの友人で(といっても実は本名は知らないけど)、その名の通りずっとメコン・デルタ界隈で移動をしながらいろいろな人をインタビューして、それらをポケットwifiで海外の編集者に偽名で送ったりするという活動をしている。自力でラジオをつくった森の奥にすむ民族の少年とか、オセアニア界隈の地元のサーファーの特種な技だとか、ほかに東南アジア圏のギャングの食生活などをレポートしている。各地の現代アートにも詳しく、自身も作品として架空のインタビューの記事をつくったりしている。僕はジャカルタで知り合った。いまは僕のドラマトウルクに近いというか、そういう距離にいる。

メコン・タイガー (以下MK): 今年はずいぶん忙しく、YCAM*で展示とパフォーマンスを組んで、青森のホテルでコラボの作品を作っていたね。

* 山口情報芸術センター (Yamaguchi Center for Arts and Media)



牛タンと筆者

いまはフライブルグ？ 何をしてるの？

塚原：フライブルグは割りと大枠で呼ばれたというか、来てから知ったけど「都市とガーデニング」という内容の中規模のフェスの一環として呼んでもらった。いずれにしても前から呼びたいと言ってくれていて、やっと実現したので良かった。僕たちは劇場に滞在してるんだけど、その滞在の様子を撮影してフェイクのドキュメンタリーをつくる。それがメイン。パフォーマンスもやるけど、それも滞在中の出来事として映像は客観的に扱う。フェス自体は、劇場前の広場で作った麦をひいてパンを焼いたり、予想外のベクトルを含んで驚いた。担当がアンナ・ワグナーという2011年にゴンゾのヨーロッパツアーを画策した人のひとり。非常にクレバーな人だと思う。

MK：へー、劇場はどんなところ？

塚原：フライブルグ市が持つ劇場で、オペラとか演劇とかそういう古典をおそらくメインでやってる典型的な地方の公立劇場。でもコンテンポラリーの部門もあって、おれらがなんやかんや打ち合わせしてる横でヤスミン・ゴデールのチームが制作してたりもする。5個くらいサイズの違う空間があって、それぞれが専門のテクニカルチームをもってる。オーケストラやオペラ歌手も含めて250人くらいが雇用されているらしい。エレベーターでコントラバスの軍団にかこまれたり、階段を10人くらいのカツラの集団がいそいそと歩いてたりする。そこにゴンゾ。

MK：そういう劇場のテクニカルチームとはうまくやってるの？

塚原：映像を作るってこと以外はほとんどノーブランチで来て、来てから小屋っていうかゴンゾ解釈の茶室を建てたいとかそういう話をしたり、木の端材をあつめたくなって使っていいよと言われた部分をあさっていると、別の人はウロウロしてるおれらを観て「あれは誰だ？ なんで勝手にここにいるんだ。」みたいなことになって、それをアンナが間に入れてくれる。そんな動き方する人がたぶん来た事が無いからだと思う。あとはこっちの人は思っていた以上に計画的に動くので、やりかたとしては正反対というか。インパクト、丸鋸を持ってきてたら僕らで1日で出来る事が、劇場の木工チームに発注しないと3日かかってしまったりする。仕方ない。それは特化している部分が違うから。個人個人としてはみんないい人だし、もの凄く献身的に考えてくれる。ただ、アンナとしては対システムとのそういうコンフリクトは予想していたらしい。そもそも僕らみたいなのを「劇場」に放り込みたかったみたい。

MK：なるほど、それはまあしゃあないね。そして、君らも君らやわ。

塚原：いや、でも謝らへん。感謝する方向で。

MK：最近はMoMA*をはじめ、ダンスの企画より美術の企画で呼ばれる事が多くなった？というか今回みたいにその間というか。

塚原：確かに。MoMAでやったのもそうだしYCAMでの企画とかもまさにそうやったと思う。山にすんで、美術展を仕込んで同じ経験と素材をもとに、パフォーマンス・ツアーのような作品を作ったり。でもそれぞれは独立してみれる構造というか。それにそもそも「ダンスの企画」って少なくなってると思う。

MK：まあそれはそうかも知れない。あっても、まあここにゴンゾは呼ばないやろうっていうラインナップだったり。でも劇場でやる事と美



国立国際美術館 風穴展でのインスタレーション Photo: 福永一夫

術としてやる事とかどう考えてるのかとか聞かれない？

塚原：たまに聞かれるけど、どうしてそれをやるのかということあまり考えてない。劇場であれ美術館であれ、ギャラリーであれ、やればやるほど、やりたい事は山ほど出てくるので、なぜそれを、どこでやるのかを自己問答として考えることはいまはない。そこ整備しすぎたら僕は面白くないし。それに美術の分野だからパフォーマンス作品が作れない訳じゃない。もしくはパフォーマンス的な発想で物を作ることにはできる。国立国際美術館の風穴展で作らせてもらったインスタレーションとかはまさにそう。人がいなくてもパフォーマンス的な状況を作る試みというか。

あとは、昔ダンスボックス**で制作スタッフだった頃「アーティスト」という人たちがどうやって生計を立ててるのか全然分からなくて。身の回りで売れてる人、仕事の多そうな人のギャラを想像しても、年間で大人が暮らせる金額ではないなと気付いた。毎日考えて、夢の中でさえ考えて、作品を作ってもその分のペイがある訳じゃないし。で、それってどういうことやねんと、なんかちょっとイラつき始めて(笑)。例えば、自主企画とかの予算書を見てると、自分の取り分はほとんど無く、人のために仕事作ってるようにさえ見える。つまり、自分で作り始めたためっちゃ売れないと日本でダンスの現場だけでは暮らせないぞと思って仕事の場所を増やしたいと思って、ダンス以外の現場にいる人たちとも話し始めた。それが大阪府立現代美術センターでの吉原治良賞記念アートプロジェクトに参加することにつながって、そこからいきなり今までのことが文字通り全部地続きにある。その間、6年くらいかかってるけど。

それに加え、自分たちがやろうとしていることを考えるとダンスだけでなく、美術の現場の方がより広く考えられる部分があると思ってたから。ダンスの企画で、今回は映像だけですとか、動いた痕跡だけですとか、言いにくいでしょ。それに美術にもパフォーマンスの歴史はずっとあるから。屋根から飛び降りる写真、とか。大きい紙をつきやぶる、とか。そういう文脈とも接続させてみたかった。その方が家に帰って考える事がたくさんあるから。

* ニューヨーク近代美術館(The Museum of Modern Art, New York)

** NPO法人 DANCE BOX



リハーサルと称した「山サーフィン」

だからそういう二つの理由でいろいろなところで仕事をしている。そういうコンセプト的なプロジェクトのつもり。ほくみたいな「アーティスト」じゃない人がアートできるのかとか。そういうのも含めて。

MK: きみは「アーティスト」じゃないの？

塚原: 多分違う。そこに紛れ込んだ人が作品発表してる。原理主義的に考えると、ぼくはまだ劇場のボランティアスタッフ。バレないように舞台上に出てきてる。もしかしたらやっつことも無理矢理に芸術分野に落とし込んでるだけかもしれない。

MK: ちょっとわかるような、わからないような。でもアマチュアリズムがある種のエスタブリッシュメントとぶつかるところに面白さを見いだしてるよね。確実に。そのことかな。コンテンポラリーダンスのエスタブリッシュメントに関しても別のところで話してたね。それで言うと例えばゴンゾはリハーサルとかわざとやってないね。山を滑り降りるのがリハとか言ったり。ところで、お金の話になったから聞きたいけど、なんか活動の始めの頃は家もボロボロだったよね？ 一度、泊めてくれた。

塚原: 2008～2012年くらいかな、まったく金なかったしね。考える時間も無くなってきたからバイトもやめたし。しかも家賃一万円のボロ屋を、はじめは改装しながらその切り出した廃材を捨てる金さえないから毎日木材を20センチ以内に刻んで普通ゴミとして捨ててた。一ヶ月くらい(笑)。そのまましばらく、イタチやネズミと暮らしたら、世の中がだいぶ変わって見えた。その頃も頑張ってたはずだけど、一方で「どないしてくれんねん。もう後は無いんやぞ。ほんまに知らんぞ。」という、誰に向けて言ったのかも知らないけど、ひとりでめちゃくちゃ偉そうな気持ちでいた。多分大きな方向に言った。

MK: だれも君の事なんか知らんのにね。

塚原: その通り。

MK: これからはどういう活動が待ってるの？ もしくはやりたい事はある？

塚原: 今は来年のヨーロッパツアーの話し合いを進めているところ。ゴンゾの活動以外には、いま2014年の2月にアジア圏のアーティストにフォーカスしたダンスフェスのディレクションをする。主催はダンスボックスで。それが凄く楽しみ。

もっと長期的な事で話すと、ぼくは大阪市に、企業が共同で出資

する現代美術館を今住んでる中津という地域に建てたい。200席ほどのシアター付きの。その美術館は行政主導ではないというのがミソで、課題が多すぎるけど、それが実現することは可能だと思う。資本主義がここまで来てるのに企業が考えを変えないのはおかしいし、余裕があるからではなく、文明に投資するという哲学ごと共有してリスクを負ってもら。スポーツメーカーとか建築工具のメーカーとか、薬品メーカーとか、美術作品を収集したらいいのと思う産業分野が山ほどある。そこに、とにかくまかせてくれと。去年、ザルツブルグにある「サウンド・オブ・ミュージック」の舞台にもなった古城での泊まり込みの勉強会に参加してその考えを強くした。ファッションではない、静かに未来へと食い込んでいく現代の美術作品を集めて地元の

人たちと共有したい。一方で、僕が多大な影響を受けた大阪にある地の特有の表現、ブリッジやベアーズ、エポック等の空間が見せてくれた表現も同じように紹介したいし、保育所、出版部門も必要。

MK: 君の考えるノアの方舟という事やね。

塚原: のったら沈みそうな言い方するね。でも話すのはタダやし、書いておいたほうが誰かが見てくれる。ぶっちゃけまず25億円くらい欲しい。そしたらその後の25年くらいは、めちゃくちゃ状況を変えられる。君は今なにしてるの？

MK: いまは、いろいろと移動しながら記事を書いて、舞台芸術3部作、みたいな文章を書いている。気配を消す事が抜群にうまくて上演中も客には見えずに舞台の真ん中を横切ることができるフリーランスのテクニカルスタッフが、色々出来ちゃうから、ギャラを3人分要求して揉めるっていうやりとりを生い立ちから文章にして、そういう方向の物をまとめて出版してくれそうところを探してる。

塚原: だいぶ変やな。

いちばん始めに書いたメのような文章

contact Gonzoをやっていると、よく聞かれる質問に「これは芸術か。」というものがある。おそらく「いったいどういうつもりなのか。」とい



Stelarc × contact Gonzo -BODY OVERDRIVE-展 (京都芸術センター/2010) より

う質問なのではないかと思うが、自分たちとしても「よくわからない。」というところである。もっと言うと「芸術であつてもいいし、そうでなくてもいい。どちらにしてもそれは僕らに影響は無い。」というところであり、そもそも私たちはその判断をする立場に無い(多少は「なんだその質問、ケムに巻いてやろうぜ!」と考えているときもあるかもしれないが)。つまり芸術であろうと、そうでなかろうと、この何かしらの状態は、既に生まれていて存在している。それこそが僕たちの強みであり、それが何なのかを定義する事は、僕の考える芸術家の仕事ではない。そもそも芸術家がいちばんいい仕事をするときは、もう何が何だか分からない、ちょっと気を失ってるかのような時間帯に大事な部分が出てしまう事も多いのでそもそも本人に正確な定義付けは不可能であろう。

大げさな話に聞こえるかもしれないが「芸術」は「サーフィン」とともに人類の最後の砦だと考えている。それは例えば「資本主義」とか「科学」よりも奥に位置すると僕は考えている。人間という種は、ある時期から能動的に、自分たちでは理解できない、すれすれのものを生み出しはじめている。ある特異な個人ではなく、人間という種が必然的にそうしている、という考え方である。合理的でない、非生産的な何かしらを。それはまるで自らの頭脳を試し続ける行為のようにも見受けられるし、言い換えればそれは認識行為の境界線を暗い部屋で毎日問い直す作業である。拡張するだけでなく、ひっくり返したり、ねじったりしているかのようである。それは「芸術わからへん。」という人間もすべて巻き込んだ無意識の協働作業で、そこに自分もいる。全く驚くべき事である。



塚原悠也 (つかはら・ゆうや)

1979年京都市生まれ。2002年よりNPO法人DANCE BOXのボランティアスタッフとして参加。2006年にcontact Gonzoを垣尾優とともに立ち上げる。現在は5名で活動。関西学院大学大学院文学部美学専攻修士課程修了(永田彰三ゼミ)。人と人とが殴り合い接触するパフォーマンスをはじめ、そのリハーサル代わりに山や森に入っていた経験から「山サーフィン」を開発。巨大なコンクリートの坂や、土砂崩れの跡等をメンバーが滑り落ちる映像を制作する。

<http://contactgonzo.blogspot.jp/>

近年の主な活動

- 2010年 六本木クロッシングにてインスタレーション発表
あいちトリエンナーレにてパフォーマンスを発表
- 2011年 国立国際美術館「風穴展」にてインスタレーション発表
- 2012年 パノラマフェスティバル(リオデジャネイロ/ブラジル)参加
- 2013年 ニューヨーク近代美術館(ニューヨーク/アメリカ合衆国)にてパフォーマンスを発表
YCAM10周年記念事業にて森に2週間滞在し、インスタレーション、パフォーマンスを発表
レイキャビク・ダンス・フェスティバル(レイキャビク/アイスランド)参加
12月7・8日 Take a chance project030 コンタクトゴンゾ×ホンマタカシ『熊を殺すと雨が降る』(伊丹市アイホール)
12月21日~2014年2月16日 メディア・キッチン/タイ展(バンコク芸術文化センター)

【お詫びと訂正のお知らせ】

viewpoint第64号の松岡和子氏による記事「つなごうとする意志—2013年上半期の舞台を見て」におきまして、文中では「伊丹市のアイホールはこの秋『現代演劇レトロスペクティヴ』と銘打つ企画を始動させます」とありますが、正しくは2009年度より開始され、本年度で5回目を迎えます。関係者ならびに読者の皆様にお詫び申し上げます。

viewpoint セゾン文化財団ニュースレター第65号

2013年11月30日発行

編集人: 片山正夫

発行所: 公益財団法人セゾン文化財団

〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-1 東貨ビル8F

Tel: 03-3535-5566 Fax: 03-3535-5565

URL: <http://www.saison.or.jp>

E-mail: foundation@saison.or.jp

●次回発行予定: 2014年2月末 ●本ニュースレターをご希望の方は送料(90円)実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。